

ふたば園の思い出

昭和31年度第1回入園生 八木 淳 夫

4歳になったばかりの私は、母に連れられて家から最も近い三重大学教育学部附属幼稚園に入園するべく、その入園試験に臨んだ。試験の1つに次のような質問があった。『音はどこで聞きますか?』。それに対して私は『足で聞きます』と答えたらしい。結果は不合格、人生最初の挫折を味わった。そこで私の両親は思案した結果、家から少し遠いが、今度新しく亀山高校に幼稚園ができるらしい。無試験で入れてもらえるからそこへ入らせようと決めた。私がふたば園に入園することとなった経緯である。

担任は奈良教育大学を卒業されたばかりの横山先生であった。先生はある時『やぎくん?』『やぎくん?』と何度も私に話し掛けられたことがあった。私はその度に『うん?』『うん?』と答えた処、先生はその度にげんげんな表情をされる。どうしたものかともじもじしていると、『やぎくん。人から話し掛けられた時は「はい」と答えなさい』と諭されたのである。それ以来、私は人に「はい」と答えることにしている。

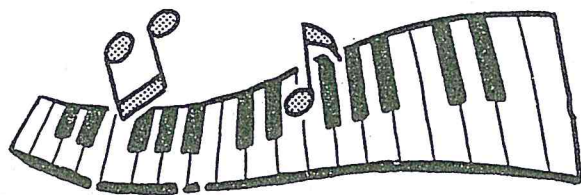
入園した当時の建物は皆新しくペンキのおおいがした。当時の亀山には珍しい近代的な給食施設が整い、給食時には音楽の放送があって「メエメエこやぎ」が掛かるとからかわれた。給食後にはお昼寝の時間があったが、寝つかれなくて困った。午睡後に退園となる。夏にはシャワーで遊び、スイカも出た。園で一泊して夜は園庭でキャンプファイアーもした。秋の運動会は大まりころがしを亀山高校のグラウンドでやった。亀高生の出し物としては、家業の仮装行列が印象に残っている。遠足は名古屋港で大きな船を見学し、東山動物園ではじめて象やライオンを見た。誕生日には甘い和菓子をいただいた。卒園式の日、先生方は泣いてくださった。

私にとってこのようなかけがえのない思い出の残るふたば園が、この度廃園となることを聞かされ、胸の痛くなる思いをした。せめてものおぼろげな私の記憶をたどりつつ、当時お世話になった先生方に感謝いたします。



「双葉園の思い出」

昭和35年度卒園 中尾 貴美子



今、思い出すと40年以上も前になる頃でした。本町で3歳から保育園に通い、5歳で憧れの双葉園に通うことになった私は、もともと病気がちで身体が弱く大切に育てられたせいか、わがままで自分の言う事は

何でも人は聞いてくれる・・・といった大きな態度の幼稚園生だったと思います。当時、男の子とつかみ合いをしても迫力で互角に戦った記憶もあるほどです。でも、音楽に出会うきっかけを持てたのは双葉園の素晴らしい環境があったおかげだと心から感じています。いつも双葉園では「お昼寝」の時間があり、母に作ってもらった枕つきのmyふとんでそれぞれの園児がチャイコフスキーの「白鳥の湖」のチェロの音をバックに穏やかな眠りについたものです。幼心にクラシック音楽の素晴らしさが素直に聞ける良い基礎をつけていただき感謝しています。

当時、キャンプでお泊りの日があったそうですが、どうしているのか心配した母と父が私に気付かれないようそっと覗いたことがあったそうです。皆が集まって遊んでいる所をいくら探してもどうしても私だけ見つからず、大変な心配をしていたところ、まさか・・・と思いつつグランドピアノの下を見たら、ちょこん・・・と座っている私を見つけたそうです。そんなにピアノが好きなのか、と両親が思っていた頃に双葉園でヤマハ音楽教室が始まり、オルガン（当時はピアノよりオルガンの方がポピュラーでした）を習い始めました。そのお稽古は本当に楽しくて、今でもそのテーマの歌はたまに口ずさんでいるほどです。その時指導してくださった先生（すみません。名前を忘れました。）が「この子（私のこと）は音感が良さそうなので特に和音の聞き取りをさせておくと将来役立つ」とアドバイスしてくださりそのおかげで音大を目指しその道を歩む事に決めた私は和音が得意の「聴音」が強い学生に成長したと思います。ちょうど幼稚園生位の幼い時期に2つか3つの音を同時に聞き取らないと大人になってからどんなに頑張ってもその能力は身に付きにくいことを後で知った私は、その時小さい時にしておけばよかった・・・と後悔している友人達をみてどんなに感謝したか想像してみてください。

その後音楽の道を歩み、特にオーストリアに勉強で住んでいた時、3、4歳からソルフェージュが盛んで、和音の聞き取りやリズム感の育成に力を入れた教育の仕方を見た時も双葉園の環境が、いかに将来の教育を先取りした内容の濃いものだったかを改めて感謝しましたし、自分も教育を人の将来にかかわる責任のある仕事だと学ぶことができました。

また、当時、合奏の時間には大太鼓（女の子が叩くのは珍しい楽器）を打たせていただき、リズム感が正しくないと皆が合わないことを学びましたし、その後、指揮（これも女

子では珍しい)を振らせて載せて、全員を統率するために1人1人の特徴をつかむ大切さも子供なりに学びました。

考えてみると、今の私の音楽の人生は双葉園から始まったといえると思います。その私の、いえ卒業生全員の思い出のいっばいつまった双葉園が閉園になる・・・とお聞きして大変残念ですが、これまでお世話になり沢山教えていただいた教訓を、卒園生として、皆さんに何らかの点で貢献してお返しできれば・・・と思っております。本当にありがとうございました。

ふたば園の思い出

昭和36年度卒園 井口 桂子

私のふたば園時代、遙か昔40年も前のことであまりよくは覚えていませんが、家から園まで近かったこと、先生は牛尾先生で、たくさんの友達がいたように覚えています。それと一番覚えているのは遠足、運動会など、必ず高等学校のお姉さんが黒のボックスの上着にヒダのジャンプスカートを着ていていつも一緒だったことです。絶えず園の方へも来て遊んでもらったんだと思います。卒園してから40年ふたば園がなくなってしまうと聞いて大変残念で悲しく思いました。地元の小学校・中学校・高校絶えずふたば園のそばを離れることなく働くようになっても亀山に住むようになり子どもも迷わずふたば園にお世話になることに決めました。まだ牛尾先生も現役でいらっしゃって私のことをよく覚えていて下さいました。

私の娘が入園をさせていただくことがわかった時、たいへん喜んでいただきました。先生は澤先生で娘二人計4年間お世話になりました。自分の思い出はあまり遠すぎておぼえていませんが、娘がお世話になっていた時の事は鮮明に覚えています。私の両親が亡くなっていたため下の子を見てもらえず絶えず一緒、遠足、夏の夕べ、運動会、保護者会など妹もいつも同じで妹は4年間通ったようなものです。上の子は給食で好き嫌いがあり苦労していましたが卒園の頃には殆ど食べられよく頑張りました。又、運動も得意ではないので、とび箱でも苦労してました。下の子は何も問題なく2年間過ごし卒園をさせていただきました。知っていた先生がいたし、自分の卒園したふたば園に子供が通えてよかったと思っています。

上の子は違った道に進みましたが、下の子は亀高に入学し、総合生活科幼児教育コースに進み、今3年生です。その間もふたば園の先生方にお世話になり、卒業後も保育士になりたいとがんばっています。ただ娘の卒業と同時にふたば園もなくなってしまうのは残念だけど私と娘二人ともに同じふたば園で学べたことは幸せなことだと思っています。

双葉園とわたし

昭和41年度卒園 境 浩 一

この度、双葉園が廃園になると聞き非常にびっくりしております。

双葉園に入園する際に、親と同伴で簡単な色を答えるテストのようなものを受けたような記憶があります。

嬉しい気持ちと不安な気持ちで、初めて双葉園の門をくぐったことを覚えています。当時、私達、5才の子供が幼稚園に入園するということは、初めての団体生活の第一歩ではなかったかと思います。

入園の日、お互い誰だかわからない人と並び、それが数日後、お互い友達になっている、これが小さい子供のいいところではないでしょうか。

いたずらっ子がいて、泣き虫がいて、泣いたり、笑ったり、子供ながらに一生懸命、グループ、団体生活の基礎を学んだと思います。

双葉園といえば、私自身思い出すことがあります。

それは、卒園して16年以上経ったある日、町で見知らぬ女性に、“あなた、境君じゃない？”と突然声を掛けられたことがあります。

なんと聞けば、その女性は、当時、私が双葉園にいた頃、保母さんをしておられてた方で、私のことをよく覚えておられました。

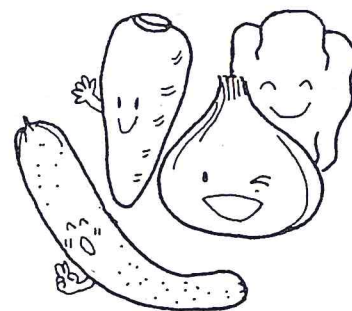
何人ものたくさんの卒園生がいるのに、よく私のことを覚えていておられて、とても感激したのを覚えています。

そんなに私が印象深かったのだろうかとびっくりしました。

双葉園では、確か昼食の時、白いご飯だけ弁当箱に入れて持っていき、おかずだけ給食だったように記憶しています。その時、嫌いな給食のおかずが食べられずに、食べ終えるまで一人だけ残された記憶があります。

そんな双葉園も廃園になると聞き、何か寂しいような気がします。

卒園して以来あってない友達もいます。みんな今どうしているんだろうかと思います。今、あらためてお世話になった保母さん、先生方に感謝したいと思います。



昭和46年3月 ふたば園を卒園

昭和45年度卒園 種村恒憲

春、秋のバス遠足で名古屋の動物園へ行ったこと、夏の夕べの会での花火、高校の運動場で鼓笛のこと等、年長、年少それぞれ30名の家庭的な暖かい中での園生活をなつかしく思い出します。当時としてはめずらしく給食で好物の時は大喜びでしたが苦手なものには苦労したことが最も印象に残っています。今となってはなぜだか信じられませんが、特にカレーが嫌いで、好きになるまでには大変でした。また、高校生の保育実習園で、木曜日に“お姉さん先生”が大勢で、楽しかったことも思い出されます。今、私は、年中児の父として名古屋での生活です。100名以上のマンモス園で、バス通園する我が子の姿に重ねてみますと、何と恵まれていた幼児期だったのだと思われまます。自然がいっぱい高校の土手でターザンごっこ、ジャングル探検、昆虫採取等、暗くなるまで友達と遊んだこともなつかしい限りです。

沢先生より突然の原稿依頼のお電話を頂き、ふたば園が閉園される事を知りました。時代の流れとは言え幼い日の思い出が消えていく淋しさは言葉では言い表わすことが出来ませんが今日まで頑張ってくれました先生方に心から感謝の気持ちでいっぱいです。初めての集団生活でいろいろの事をきちんと教えて頂き楽しくスタート出来ました。よき時代のふたば園。たくさんの卒園児の心の中で、ふたばの灯はいつまでも輝いていることを信じます。



昭和40年度卒園 坂 倉 由美子 (旧姓、栗林)

そっと目を閉じると、白いエプロンの付いた園服を着て、みんなと笑っている刈り上げ頭の私がいる。

当時のふたば園は、砂場に遊具、黄緑色の葉っぱの太い大きな木があって、木陰もここち良い、小ぢんまりした園でした。遊具も、楽器も、お部屋も、洗面所も新しく、どこかしら近代的で幼心にも「うちの家とは違うなあ」と、思ったこと、今も覚えています。

おもちゃの卓上ピアノしかなかった私。園のオルガンでねこふんじゃったを弾けることがうれしかった。運動会には、鼓笛隊を皆がさせてもらった。私は赤いワイン色の小太鼓を軽やかに得意気に打ち、行進した。密かにカッコイイと思ったりした。給食のおばさんが作ってくれた家には絶対ないメニュー。美味しかったでも、あさりのミルク煮は、どうしても食べられなくて、外で遊べずに泣いたこともあった。演奏会で男の子みたいに、大太鼓を打ったこと。猫の膝当てアップリケの付いた大好きなズボン。お尻が破れ恥ずかしくて泣いたこと。バス遠足の鳥羽水族館。好きな男の子の隣り、手をつなぎ、ドキドキしながら歩いた。おませだった私。キャンプファイヤーもしてもらったお泊り保育。お母さんがいないと泣きじゃくり、とうとう牛尾先生が母をよんでくださったこと。泣き虫だった。お遊戯して、みんなで歌ったおもちゃのチャチャチャ。一緒にあそんでくれたやさしい亀高のお姉さんたち。もも組、き組のお友達。休まず園に通い、うんと遊び楽しかったふたばの頃。先生方が教えてくださった礼儀、ルール、そして童謡の数々。すべてが、感性豊かにしてくださり、現在の私となる第一歩に導いてくださったと思っています。

世の中の移り変わりとともに、ふたば園の歴史に幕を閉じることは、言い知れない淋しさですが、ふたば園が消えてしまっても私の心の中に、在り続けていくことでしょう。

ふたば園の思い出

昭和42年度卒園 豊田 邦 敏

私がふたば園に入園したのは、昭和40年です。振り返ってみると入園するためのくじ引きがあり、そのくじを引くのは入園する私でした。当たらなかつたらどうしようと思いながら、くじを引いたのを覚えています。

年とともに記憶も薄らいでいきますが、思い起してみると、近所の女の子と手をつないで通園していたこと、桃組(年少)・黄組(年長)があったこと、冬には持参の弁当を暖めてもらったこと、転入してきた園児をいじめて先生にきつく叱られた事、昼食も忘れるくらい頑張って絵を書いていたことなど、思い出してみると次々と思い出します。

自分の子供も、ふたば園を卒園しました。子供の入園式に行くとそこには、私がふたば園にいた時の牛尾先生がみえました。おどろきとともに懐かしさが込み上げてきました。親子ともどもお世話になった、ふたば園が廃園になるのは残念ですが、これも時代の流れかなと自分に言い聞かせています。長い間ふたば園で園児と高校生の両方を指導してこられた牛尾先生、澤先生



方々、亀山高校の学生の皆さん本当にありがとうございました。そして、ふたば園の思い出は、私や子供、卒園児の皆さんの心の中に一生残っていることでしょう。

ふたば園での思い出

昭和43年度卒園 森 千 洋

ふたば園の思い出は亀山高校の保育科のお姉さんに来てもらってあそんで頂いたことです。私には、妹、弟はいたのですが、姉がいなかったのですごくうれしかったのだと思います。先生方にはもちろんいろいろな事を教えて頂いたと思いますが、お姉さんたちには私たち子供の目の位置に立ち、おりがみをしたり、ままごとをしたりと楽しかったことを今思い出しています。

“大きくなったら何になりたい？”の答えに“幼稚園の先生！”と答えていたのも楽しい思い出のおかげだと思います。運動会も高校の大きなグラウンドでした事をおぼえています。



父兄にとっては少しものたりなかったようですが・・・。

ふたば園は今年度で閉園となりますが、その楽しかった思い出は私の心の中にこれからもずっと生き続け、消えることはないでしょう。

先生方ありがとうございました。

「ふたば園」に想いをよせて

昭和45年度卒園 市川（中山）由美子

『ふたば園』がなくなるらしいよ」

という話が少し前に何処からともなく耳に入ってきました。『そんなぁ?! でもまだうわさ話だし・・・』と、何とか自分の心の中で打ち消そう打ち消そうとしていました。

「ふたば園」何となつかしく、柔らかく、優しい響きなんでしょう。園舎、園庭、制服のスマック、帽子、そして園での生活、色々な事が断片的に思い出されてきました。卒園して30余年、長い長い年月が過ぎているにもかかわらず、本当にたくさんの場面がはっきりと浮かんできました。

そして今夏、川戸（澤）先生からの突然のお電話。『あぁやっぱり本当だったんだ』忘れかけていたこの事を確信することとなりました。急に寂しい思いが募ってきましたが、川戸先生あの頃と少しも変わらない声、なつかしく嬉しい何とも言えない複雑な気持ちで話していました。

園では本当に色々なことを教わり、そして遊びました。特に私は外では遊べない雨の日などに過ごす「リズム室」での活動が大好きでした。先生が弾いてくださるピアノの音に合わせて、飛んだりはねたり、走ったり……。今でもはっきりと覚えています。楽しくて仕方がない程、キャーキャー言いながら騒いだこと、そして川戸先生の優しい笑顔。



現在私はヤマハjet所属のピアノ、エレクトーンの講師をしています。その原点は確実に「ふたば園のリズム室」にあることは、まちがいありません。園庭、園舎はなくなっても、思い出は永遠に……。

ふたば園の思い出

昭和44～45年 駒谷みどり
平成10～11年 日菜

ふたば園は、親子2代でお世話になった思い出深い園です。

日菜に、「ふたば園の思い出ってなあに？」と聞くと、すぐに『おにのお好み焼き!!』と元気のよい答えが返ってきました。節分の時期に、給食で鬼をかたどったお好み焼きが出たそうです。「角は大好きなウインナーやった。ほかはなあ、こんなん・・・」と、学校で習いたてのパソコンで絵を描きました。

母親（みどり）の思い出も第1番は、給食のことです。ある日、給食の時間の前に給食室から給食の先生が手を濃いピンク色に染めて出てきました。「きょうの給食はなにかな？」と、思っていますと、ほどなく「さしみとだるまさん型のゆで卵」が、ろうじに並べられて教室に運ばれてきました。見ると、その中のひとつのゆで卵は、だるまさんの頭に大きなこぶができた状態になっていました。「あれがあたら嫌やなー。」と、内心想って配られるのを待っていました。すると、その大きなこぶのできただるまさんのゆで卵がのった皿は、わたしに配られました。それだけでも泣き虫のわたしはべそをかき始めました。その上、目ざとい男の子たちが「あっ、たんこぶや!!たんこぶ!たんこぶ!」と囃したててきました。もう、悲しいのが増してきてわんわん泣きました。そこへ、「どうしたん。みどりちゃんのだるまさん帽子かぶっとるやん。こぶと違うやん。」と、津村さんと藤本くんが言ってくれました。「こぶ」と言っていた子達も、「そやな。帽子や。」と、言いました。おかげで、わたしはその日の給食の出来事が今でもうれしく心に残っています。

他にと言いますと、ピアノの楽譜立てにはいつも分厚い本がたっていて『かわとみちよ』（澤先生の旧姓）と書いてあって、よくピアノもさわらせてもらいました。ある日、新しいうたを教えてくださいました。『べこの子、うしの子、まだらの子〜』と、まず先生が歌いました。「『べこ』ってなにと思う？」と、問われました。みんなで、「ああでもない、こうでもない」と、知恵を出しあったのが印象に残っています。また、歌と言えば、「うれしいひなまつり」を歌う時の振りをみんなで考える中で、わたしの提案した振りも取り入れられたことがうれしかったです。

それから、とても寒い冬の日試験官に色水を入れ、凍らせて見せていただいたことや雨の日に「よく歩いてきたね。」（片道3km）と、べたべたに濡れた足をぞうきんで拭いて教室に迎えてくださったことが心に残っています。

「本当に大切に園児を見守り、はぐくんでいただいたのだから」と、いま改めて感謝いたします。どうもありがとうございました。